朝日新聞 2010年(平成22年)10月4日 月曜日

朝をひらく

2300年前の知恵に納得

人生のパートナー

永田 円了
真国寺住職

娘が結婚する。いつかこの日が来ると分かっていた。でも……渡したくない。強烈なエゴがわき上がる。「苗字を変えるな、夫婦別姓でいけ！」。気がついたら、そんなコトバを娘に投げかけていた。

「結婚して別々な姓なんて。それじゃ、僕の方が苗字を変えて結婚を」と彼氏が申し出た。現在日本では、約97%のカップルが夫の苗字を名乗っている。彼は勇敢にも、自分の姓を変えて娘との結婚を望んだ。その潔さと思い切りに、私はびっくりすると同時に、彼の中に自分よりもっと大きなものを感じた。頑固で未練がましいエゴが、青年大仏の前で小さくかしこまった。

人は人生のパートナーをどのような基準で選んでいるのだろうか。フィーリングが合う、やさしい、一緒にいるとほっとできる、高収入。その時に働くのは、「私の考え、私の感情、私の経験」をベースにした私中心の意識だろう。

アリストテレスの問いにハッとした。「最高のフルートは誰の手に渡すべきか」。一番高値で買ってくれる人か、最もほしがっている人か、それとも、平等主義者が言うくじ引きを採用するのか。一体この問いにどう答えよう。

答えは一つである。最高のフルートは、最高のフルート奏者に与えられるべきだ、と。それはなぜか。皆が最高の奏者によって、最高の音楽を楽しめるからか。いや違う。アリストテレスの答えは「最高のフルートが、最高のフルート奏者に渡されることが、そのフルートの目的（テロス）だから」であると。

私たちの存在は、一人ひとりが世界でオンリーワンである限り、唯一最高のフルートである。であるなら、その存在を手にすべき者は、最高のフルート奏者でなければならない。

とすれば、奏者、いやパートナーの役割は、相手の中にある最高の「よきもの」が生き生きと活動できるようにしてあげること。人生の目的が目を覚まし、生き始めるようにそばにいて見守ってあげること。少なくともその流れにブレーキをかけることのないよう、お互いが努力して暮らすことなのか。うーん、そうか。これが2300年前からの知恵なのか。もっと早く気づくべきだった。

そんなことを考えていたら、私のエゴなど、どこかへ吹っ飛んだような気がする。つかの間かもしれないが。